

*Erster prinzessin
leibgarde division*

5.5





第一井衛田
第五近師



五.5

① 初めてお会いする方、初めまして。
又、お会いした方、お久しぶりです。
影002虎と申します。えーと、性慾よりも又
デュアルエッチです。はい、さうに言うと、5.5という交
替数字まで付いています。

感の良いところもお気付きですか。前に出
た同人誌の続きをと言つて、5で時間切れで、バッ
カリ切れたエロパートの描き直しの様な感じです。

お手数でなければ、第一玉女のS.P20の5コ
マ目あたりから今回の本のエロパートを続けて
いただけますか?まあ、めんどくさいの
で、ただのエロ同人誌として、好みに合えば
使、使いたければ幸いれ?かな、幸いなるか?

② ちなみに、今回も時間切れで、ラスト部分、
ボロボロです。描きたかったエロも半分程し
か描けません。おのれー次回は...と前回の
入稿の時に思ひました。自分のヘボさが
人に涙が止まらない。今、現在です。
ええ、次回には。

③ 今回描いた、自分がナニスキーナンスニアロ?である
事が痛感されたり何かたり。とも相手は
少女なのでこれがウワサのロリコン?マリコン?と
大部前に自己意識してたよーないよーな。

④ 正直、もう今は全くハビリが出来ないです。
エロニーン描いた、流れが変わると強く思いつつも
それを、なんども出来ずに作業を進めてしま
取り返せない状態に立ち入ります。はいよ。
後、一日机にまたがって出来たの一コマ、次の日
あらためて見て、男らしく描き直してみたり。
そこが描けないと、エロ同人絵描きとしての存在
意義がトホホです。



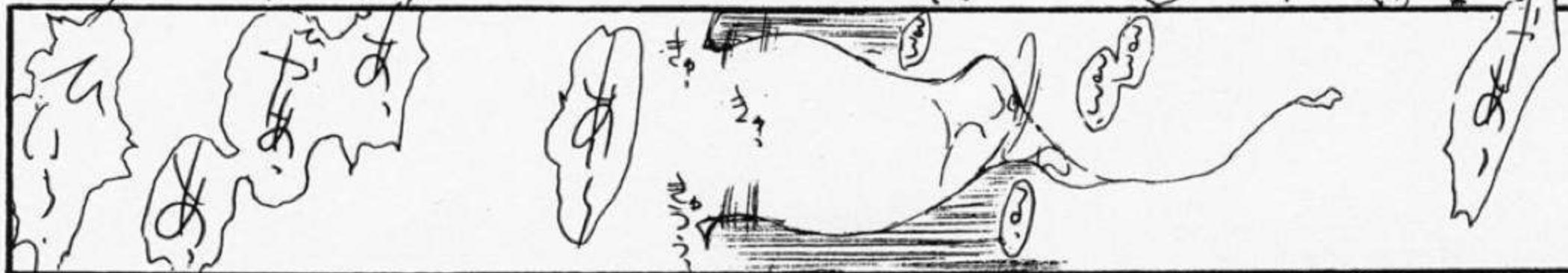




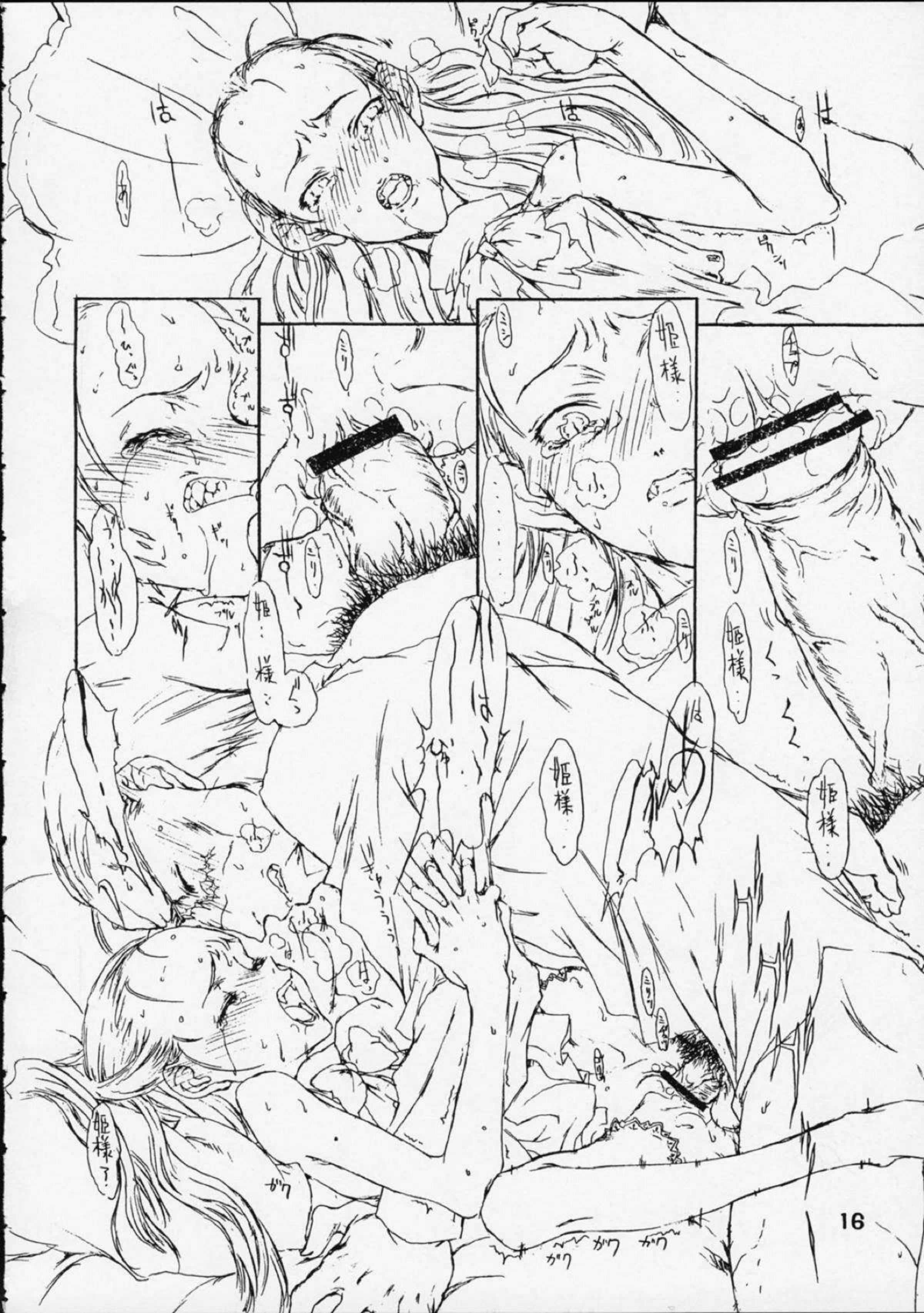


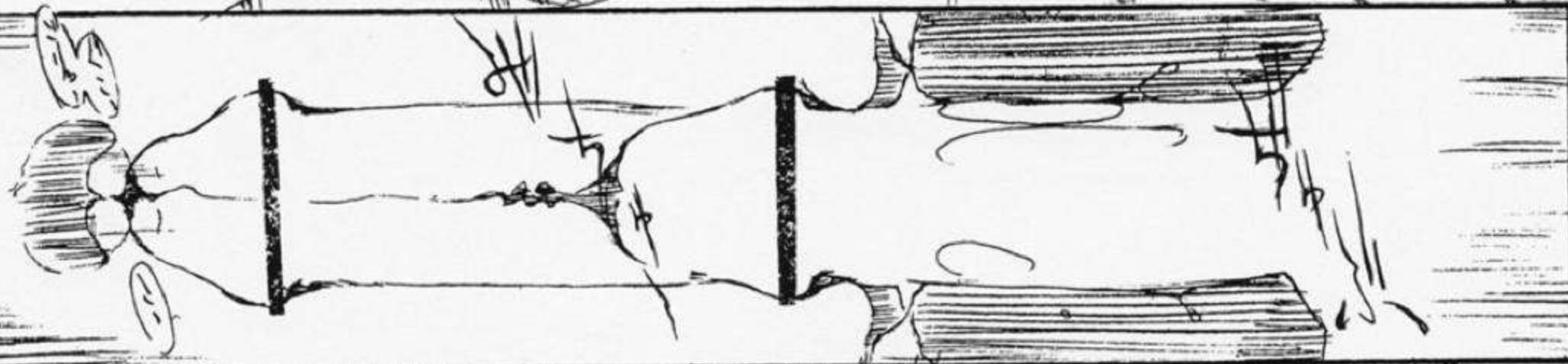








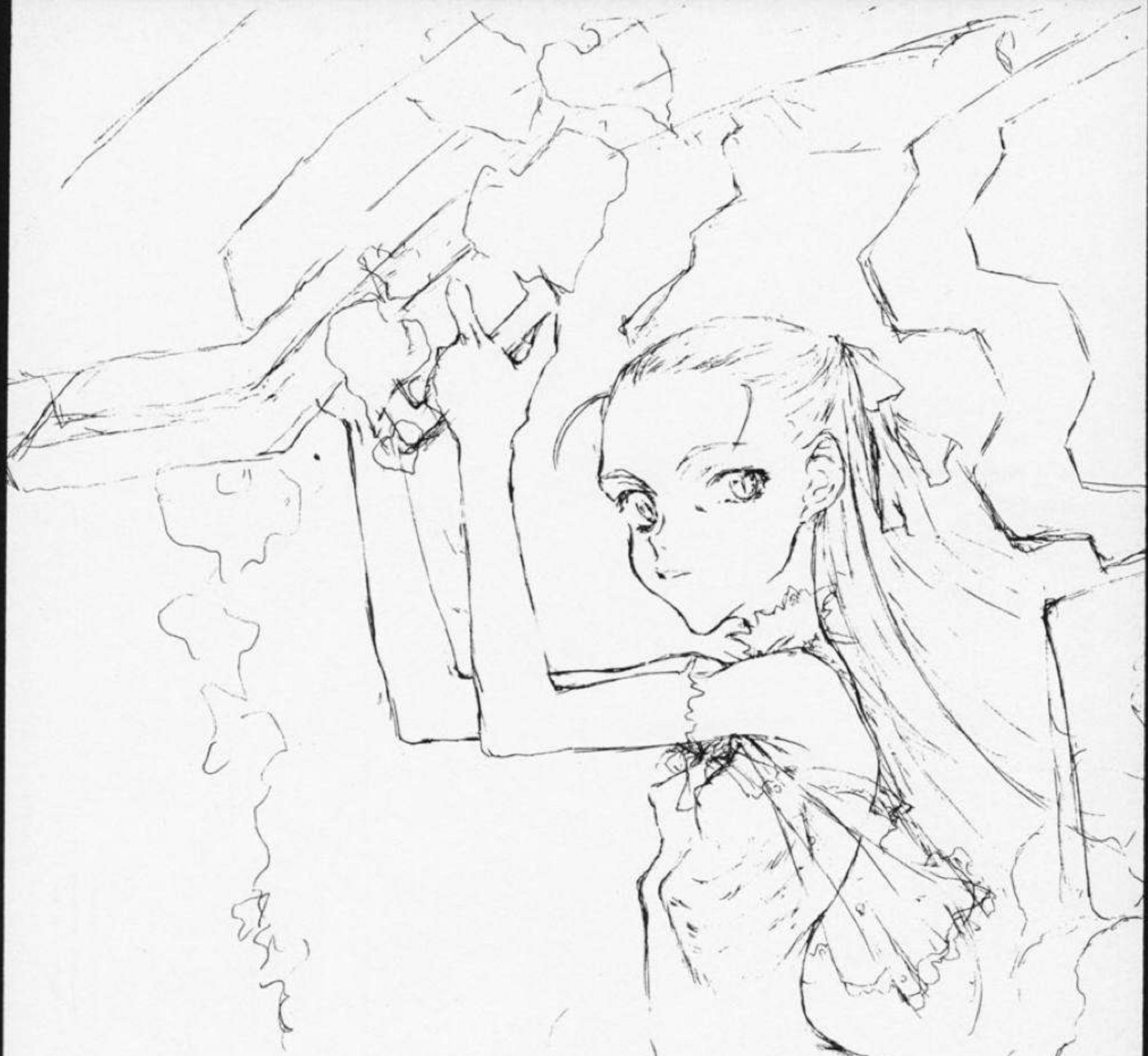






生き残る解剖の形ぢや！





◆表紙案 A

りよこす。253. x/22. 表紙作業を
や, 2人ですか カラー表紙入稿
まで 後 4日!! 無理。色塗れま
せん。2. キーか こんなん 半間か割ります
3. リカラ認可。クリオ. つまり
いた A案発生。急ぎよ。短期間
で 2種を 1 組に変更
.... あはる 描きたかったよ。





ヴァルハラの休日

我樂

「……っ」

首筋に冷氣を感じ、まどろみの霧の中から少しづつ意識が覚醒していくのをデビロットは強い違和感の中で感じていた。

ふかふかの枕、爽やかな朝の日さし、いつもあるものが、今は感じない。意識の覚醒に反比例して高まる頭痛と吐き気。背中と頭に感じるのは固いクッシヨンの感覺。僅かにただようカビくさい臭い。

「……っ」状況がつかめない…。

重たい目蓋を僅かに引き開けると、強い光が視界を被い尽くす。

「つう…」強い刺激が痛みの様に視神経を襲った。とつさに腕で目を被おうとして、はじめて両腕が拘束されていることに気付いた。

「そうか：私は襲われて監禁されておるのか」

バカンス用の私有コロニー「ヴァルハラ」にて、久しぶりの休日。油断していた。休日2日目午前中ビーチで過ごした後、ゲストハウスへもどり、着替えを済ませようとメイド型アンドロイドに近付いた時、強い電気的刺激を受けて…。まさか、完璧といわれたヴァルハラのセキュリティが破られメイド型アンドロイドがハッキングされていたなんて…。

意識は、はつきりした。身体の感覺も指先まで戻った。落ち着いて現状を確認する。何か背もたれの高い大きめの椅子の様なものに座らされ両腕と両足、それに腰をベルトで固定されている。頭痛と吐き気を眉間の皺に押さえ込んで、もう一度強い光に立ち向かう。光の中から色々な機材が浮かんできてきた。部屋は25平米（7・5帖）程度だろうか。2つの照明がこちらを向いている。それ以外の照明はこの部屋にはないようだ。「小型の倉庫の様な場所。長く使われていなかつた様だな。」

「心拍数・血圧安定、脳波異常なし」

ピクツ

突然、確認できない椅子の後ろの方から男の声が響いた。

「聞き覚えのない声だ。」その突然の登場に一瞬乱れた心を直ぐに立て直しデビロットは、冷静に考えていた。「まず、相手の目的を探りつつイニシアティブを奪い取る。」

全ての準備は、滞り無く進んだ。計画の80%は完璧に遂行できた。いやもう100%といつてもいい。右の唇が上がる。傍から見たら、かなりやらしい笑いを浮かべているのだろう。

目の前には水着を纏った若い少女が、（床に設置された色々な機械やケーブルの繋がった）椅子に手足胴を固定され座っている。

デザインの少ない白の水着は、清楚でありながら強い毒を放つこの少女の美しさを際立たせている。長い睫毛は伏せ、首はうなだれ…。意識を回復するまで、あと1時間程度だろう。

ライトは2つ彼女を直接照らしている。白い肌は、さらに白さを増し白磁器の様にきめ細かくなめらかだ。均等のとれた顔の輪郭に、大きくなりつくのつり上がった眼を持ち、切れ長の眉が綺麗に弓をひき、その瞳に仕えている。

今は閉じているその瞳だが、一度開くと妖しく紺碧に光り、その意思の強さを象徴させている。投げ出された手足スラッと長く細く、水着からわかるボディーラインは、大人へ成長途中のまだ若干固い中性的なラインと、完成された柔らかい曲線が混ざり合い妖艶さをさらに高めているようだ。それは咲きかけたバラの蕾み。これから美しく咲く事を約束されている、若々しく躍動感あふれる、そして鋭く毒々しい刺がよりその妖艶な美しさに拍車をかけている。

完璧だ。さすが最高の遺伝子の掛け合わせから生まれた最高傑作。ついに手に入れた。後はモノにするだけだ。その為の準備も万全だ。

私は静かに彼女の後ろ側に廻る。そこにはモニターが備え付けられた机とコンパネのついた椅子が置いてある。机から伸びるケーブルは拘束椅子に繋がっており、モニターには何種類かの数値情報や周波がグラフ等でリアルタイムに表示されている。コンパネのボタンを操作しながら、椅子に深々と腰を下ろす。モニターの情報は簡略化され左側に縦に並んで配置。そしてモニターの8割に彼女の顔が写し出された。

今は、もう待つだけ。気持ちを高めながら、その長い睫毛が上がるのを。

ピクツ

「私をこの様な下賤な場所に招待するものが、この世におるとは驚きだ。宇宙の一の愚か者として名を名乗ることを許してやる。名乗るがよい。」

冷静な口調に皮肉をたっぷり込めて見えない相手に解き放つ。

「初めましてデビロット姫。私は、アステリオス：という俗名で呼ばれているものです。」

その俗名には覚えがある。数年前から裏金融界で囁かれるようになつた正体不明の闇ブローカー。

「これは、これは、金融守銭奴の影の支配者殿とは、お招待頂いて嬉しく思うぞ。せつかくのお招きであるし、パーティの時間にまだ余裕があるなら、一度着替えに戻りたいのだが。」

「ふふ、残念ながらパーティは、もう始まっています、デビロット姫。それに今日のお召し物も中々魅力的です。」

「チッ！『ガマンもここまでじや！バカにしおつてええ！』瞬にして血は昇り上がり、怒りを搔き立てる。しかし、

「くあっ！？？」

「何この感覚…、気持ちがこんなに高ぶっているのに、感情が表に出せない！？」

「いかがですか？今回の余興は？」

いかにも厭らしいその声にもう一度怒りをぶつけようと声を張り上げる。

「私に何をした？」

しかし、その口から出たのは冷静で落ち着いた声だった。

「心から、感情と肉体を切り放させていただきました。」

「感情と肉体を？どう言う意味だ？」

「私の本当の姿は、学者でね。研究費が莫大にかかるんでね、稼がしてもらつてているんです。で、今回の余興も研究の成果の一つ。簡単に説明しますと、あなた手首から繋がっている機械で、常に体液の6%を私が造った改造血液が体内を巡るようにしてあります。その血液は、普通の血液と同じ働きをする以外に脳内で外部から出される特殊な信号を増幅させ脳へ直接信号を流し感情を司る脳内物質をコントロールできるのです。今はあなたの怒りの感情を強制的に押さえ込んでいます。いかがですか、随分苦しいでしょう。」

「なかなか楽しいおもちゃを作ったものじや。売る気はないか。高く買ってやつても良いぞ。」

「これは、早速の良い交渉条件を、光榮の至りです。かなり大掛かりな機械とプログラムですので交渉は追々。」

「そうと決まれば、私は帰らせてもらうとしよう。休日中とはいえ公務も少しあるのでな。」

静かな空気が一瞬、場を包む。後ろで男の気配がする。そして足音。そして初体面。

正面にたつたその男は、身長2m近い大柄な男だ。顔は、頬骨が強く張つた無骨な軍人風でその両側に配置された眼は、瞳に青く冷たい炎を宿すやや細めの三白眼。身体はかなり鍛えられているようだ。着ているタキシード越しにもそれははつきり感じられた。「どこかであつただろうか…」最初の印象。

「公務の問題はありません。私の研究成果は、まだこんなものではありません。じっくり味わつて下さい。」

「貴様、何が目的じや！」

男はデビロットの顔を覗き込み、ニヤリと笑う。

「姫、次の公務は王国直営TV（D S B C）のインタビュー。生出演の予定でしたね。その時、王国は大騒ぎ。臨時ニュースが楽しみですね。」

「その時は、貴様の終わりだ。」

「では、タイムアップまで約5時間。それまで私の研究成果を実体験なさつてください。その時正気であれば、全てをお話しましよう。」

「どちらにしろ、5時間後貴様は終わりだ！」

「フフフ：では5時間後」

こういう場合、男がする事は常に同じ：

「下賤この上ない！」

しかし、その筋でのあの男の力は、認めざる負えない。

「くうう：8099：はあ8100：あと2時間45分」

耳にはヘッドホンをはめられ、男と女の喘ぎ声が何層にも重なつたハーモニーとして鳴り響いている。目にはゴーグル状の特殊な機械で被われている。その機械は、特殊な信号を使い直接眼下の視神経に映像を送るもので、目を閉じているのが目蓋を越えて映像が見えてしまう。今はもう目を開けているのか閉じているのか全く判らない。見えているのは男女の性行為、顔は写らない：女性の体つきは私と同年代ぐらいだろうか。かなりか細い印象だ。

ヴァルハラの休日

「気持ち良かつたかい。もつとしてほしいかい、デビロット。」

「うるさい！うるさいわ！呼び捨てにするな無礼者！」

「じゃあこんなのはどうかな。」

「ひぎっ！はつ入つてくるウウ。そんなあ：かああ！」

異物が肛門から侵入し、直腸の内壁を擦り上げる。

内側がどんどん熱くなつていく。

「かああ、あああはあウア」

心と身体に正反対の苦悩を与える精神的苦痛はデビロットの想像を遙かに越えるものだつた。

それでも耐えられる自信はあつた。

「くうううう：すぐに助けが来る。耐えられる。私は悪の華、デスサタン王国第一王位繼承者、負ける訳がない。」

強く握った拳には脂汗がにじみ出でている。

「アソコがヒクヒクいつてますよ。欲しくたまらない様ですね、デビロット。今から指でたっぷり搔き回してあげますからね。」

目の前で芋虫のような野太い指が二本、幼さの残る秘裂の中に侵入していく。それと同時にデビロットの中にも一本の異物がうねりながらまだ狭いその内部を陵辱する。狭い内部も十分に濡れそぼり異物をヌルリの受け入れる。まるでその侵入を歓迎しているように。

振動とうねりの力で異物は暴れ回る。

「わああはあアアア：ふああ、きゅあかあああ

心が激しく拒絶するその快楽を許さない。つらい。ひたすらつらい。

「入れて欲しいでしょ。気持ちよくなりたいでしょ。身も心も」

「うるさい！うるさい！」

デビロットの腰がガクガクと反応する身体は心から切り離され欲望に忠実に動いています。

愛液が溢れ出している。秘裂はさらなるものを迎え入れたいと望むようにピク

ピク痙攣するように動いているのが判る。

「すっかり準備万端ですね。デビロット。でも入れてあげません。」

びくつん、一瞬身体が反る。

「なぜ？」

「あなたは確かに処女膜はあります、処女ではないでしょ。これは再生処女膜ですね。あなたは、デビロット、すでにセックスの快楽もそれによつて達す

ことも知っていますね。そして初めての相手は……」

「言うなあアああ！！！」

「お父様ですね。」

「うああああああああああああああああああああああああああああああああ

2年前の記憶が甦る。お父様と二人きりのバカニス。

そして、私はお父様に抱かれた。一日中。悪の道を行く以上セックスは、武器であり、女の弱点もある。武器を手に入れ弱点を克服する為の試練として、私は父以外の男は考えられる訳もない。

しかしこの事は、我が国でも最上級のトップシークレット。いや、私と父しか、知らないはず。処女膜再生手術をした医師は、私の顔を見ていないし、第一この世にはもういない。

「貴様ああああああ」

映像の女性は攻められ続けている。

「ふふふふ：ははははは：」

「私は、負けない！そして貴様をつ！」

映像では男がひとり加わった。女性は一人の男に弄ばれています。

「くうあああ、やめて：ひや：お父様」

ゴーグルが静かに外された。あの男が正面に立っている。

「はあ：はあつ5時間たつたか。貴様の負けだアステリオス。この程度で私は屈したりせぬわ。うつけものめが。」

アステリオスは肩をすくめ寂し気に笑う。

「お見事です。デビロット姫。さすがですね。」

何か演技じみてる様で気に喰わない：

「貴様も終わりだ、全て話してもらうぞ。」

「判つております。これで、あなたの誘拐も王国に発覚したでしょし、私が全宇宙に指名手配されるニュースを確認してからお話をしましょう。」

ヴァルハラの休日

床から立体プロジェクターが出現。そこに写し出されたものは、美しい浜辺をバックにテレビ向けの微笑みを浮かべている私。

「貴重なご休暇の最中に生放送に御出演、大変ありがとうございます。」「良い。国民の前で生の声を聞くのも、王族の仕事である。何なりと申してみよ。」

「ばっばかな…。」

アステリオスは静かに振り向く、うすい笑いを浮かべて…。

「私の勝ちの様ですね、デビロット。では、お約束通り、すべてをお話しましょ。」

デビロットの憔悴した顔に満足の色を浮かべ、アステリオスは胸元のタバコを取り出しながらデビロットの正面に仁王立ちする。

「あれは誰だ、貴様の差し金か？」

「あれは、デビロット姫です。影武者でも偽者でもありません。本物のあなた、

デビロット姫です。」

「わたしは、ここに居る！何を馬鹿な！」

哀れむ様なイヤな目つきがデビロットを見下ろす。デビロットの怒りの瞳の色を楽しみながら…：

「ここにいるあなたは、捨てられたんです。完璧な悪のプリンセスは賊に拉致される様ことがあつてはならない。デスサタン国王、あの男にとつては。」

「不要だと。」

「そう、あなたは、完璧でなければならない存在。ゆえに常にスペアが用意されている。」

デビロットの瞳にあきらかな、混迷の色が広がってきた。

「あなたの出生の謎。この国一番のトップシーケレット。それは、デビロット姫、あなたがデスサタン一族最高の遺伝子を持つと言う事です。」

「最高の遺伝子だと。」

「そう、あなたはデスサタン国王の遺伝子を最高の形で受け継ぐ為に作られたんですよ。」

「何を馬鹿な」

顔色は青白く精気の薄れた顔つきで僅かに言葉を絞り出すデビロット。僅かに唇が震えている。

「事実です。手に入るだけの宇宙中の遺伝子情報をかき集め、もつとも相性の良い女性としてあなたの本当の母親は選ばれ、その女性に人体実験を繰り返し王妃の遺伝子と組み合わせた完全な卵子が完成され、あなたは、研究所で産声を上げたのです。」

「私は母から産まれたのだ！研究所だと…。」

「あなたの母親、王妃は、権威の為の戦略結婚で、遺伝的な組み合わせは、下の方だそうですよ。おっとこれもトップシークレットです。あなたは、王妃から産まれた子供と出産後すぐに入れ替えられた。実際産まれた子供の方はどうなったか知っていますか？ 遺伝で王妃の美しさだけは継承してしまい、今は王の玩具の一つだそうです。顔だちはあなたに似ているそうですよ。おっと、話しが反れましたね。」

「そっそんな」

「そして先程テレビに出演していたデビロット姫は、正真正銘のあなたです。あなたのクローンは常に王国には3体準備されています。」

「クローンだと、それは不可能だ。記憶はどうする、成長環境によつて人は変わるもの」

アステリオスはタバコを吸い紫煙をうまそうに吐き出す。この時間を楽しんでいる。夢にまで見た至福の時。そうアステリオスはこの日の為に生きてきたのだ。

「そうですね身体の成長は、ある程度コントロールできます。成長を促進させる技術も開発されてますし、しかし確かに記憶はクローンでは…。なんてね。」

王国の科学は人の記憶の電子記号化に成功しているんです。

あなたの愛機スーパー8の整備は専用のコロニーを丸ごと一つ使っていますよね。整備にコロニー一つは大きすぎると思いませんか。月1回の操縦者同調テスト

の名であなたの脳内信号はすべてコピーされていましたよ。あの整備用コロニーの8割の機械はあなたの脳内記録の電気信号をコピー保存する機械で占められています。あなたにもしもの事があれば、データーはスペアデビロットの真つさらな脳へ約2時間でコピーされ、完璧な新デビロット姫が完成します。今回、実は、あなたの誘拐が、成功した段階で、王国中枢へ私が連絡を入れておきました。脳内記録のコピーをするには十分。そして王国はあなたを見捨てた。」

「私は見捨てられた。」

ヴァルハラの休日

「ちなみに私の本当の名前はNo.122。あなたを生み出す為に実験体として産まれたあなたに近い遺伝子を持つもの。私はあなたの様に王妃から美貌の遺伝子は継承されずデスサタン王の外見を色濃く継承してしまった失敗体です。そして成長促進実験の初めての成功体でもあります。私の実年齢はあなたと1歳しか違いませんが、私の身体と脳には35年の記憶が刻まれています。」

「：そうか、初めて合った気がしなかつたのは父上の面影が有つたからか。」

「私は20歳の時、自分の出生と記憶に疑問を抱き、あらゆるルートで調べました。想像以上に嚴重なセキュリティーに守られた自分の出生の記録を。そして私はハッキングに成功しました。頭脳は最高の遺伝子を受け継いでいましたから。そして全てを知ったのです。ただ、処分されたはずの私がなぜ生きているのかは不明です。」

紫煙が淀んだ空気を染めていく。タバコの臭いが空間を支配しはじめた。

「ふつ。で、兄上は、満足か。復讐としてデビロットを1人貶めて。」

「これは、序章に過ぎません。まだこれからです。」

「これから、どうする。また新しいデビロットを誘拐するのか。」

「いえ。1人で十分です。どうですかデビロット、お互いでこれで王国から追われる身になつたんだ、手を組まないか？」

「貴様の策略でこうなつたのに、手を組めだと。」

「建設的に考へるべきだ。君はもう、生きているだけで王国にとつて危険な存在なんだ。捕まれば、人知れず王の玩具となりさがり、死ぬより辛い目に合うだろう。」

「これが貴様の狙いか。」

「そう、あなたと手を組めば王国を撃ち破る事もできる。あなたを騙し見捨てたあの男に復讐したくはないですか。」

「断る！誰の命令も私は聞かぬ！貴様が部下になるというなら考えなくも無い。」

「なるほど、しかし、私も上司を持つなら、その力量を確認しない事には。あなたが私を使えるに足る人物なのか？そこで勝負をしましよう。負けたものが部下となる。簡単なことです。」

「なるほど、で、勝負の方法とは。」

「これで、私もお尋ね者です。私の犯行と断定してこの隠れ家を発見するまで、あと7時間と私は見ていています。公安もあなたの存在や事件性から大びらに捜査

できませんから、この程度の時間はまづかかるでしょう。それまでの間にあなたが私の蹂躪に心から屈するか否かで決めましょう。どうですか？」

「今までの展開は、やつの計算通りと言う訳か？今までの拷問は序章なのか：あと7時間。」

「これから始まるだろう色情地獄。不安が焦りを追い立てるのがハッキリ分かった。紫煙を裂いて、微笑む口の中から悪魔の言葉が響きだす。」

「ここまで展開は、やつの計算通りと言つた。今までの拷問は序章なのか：あと7時間。」

「もともと、拒否権はあるまい。卑怯者め。」

「自分を奮い立てる為に、語尾を強める。」

「最高の褒め言葉ですね。」

アステリオスは、嬉しそうに笑う。それが、地獄への始まりを告げていた。

1時間が経過した。

目隠しもヘッドホンもされていない。椅子の前には全身が見れる鏡が設置されている。

「ああっはああああくうううああああ」

声が響いている。自分の声が。鏡に写る姿は以上に艶かしい。水着姿に汗が滲み、頬は朱をたたえ目は快樂に潤み口はだらしなく半開き、また、ひとすじ涎があごを伝い落ちる。

とても高貴な女の姿では無い。

「うあああ：ふつふつふあうああ：あああああ」

さつきまでバラバラにされていた感情と身体は、今はひとつとなり、強烈に快楽への乾きを訴える。

胸と股間には椅子から伸びた振動を伝える機具が覆つていて。電気刺激と振動が同時に各急所を攻め立てる。

「ああああああううああ：つくうううは」

心が乾く、身体が欲する、伝わる刺激が快樂となり、乾いたスポンジの様に身體の中に吸い込まれていく。

しかし一向に潤う気配はない。それどころか、快樂を吸收すればするほど乾いていく、電気刺激は内臓にまで響く、身体の中が熱く痺れる。

「ああ、やあ：ダメああああ」

「お願いイカせて！」くううう辛い。」快樂にあおられ続ける。

焼けただれる、快樂に炙られ心から痺れ上がっている。

中毒性の禁断症状の様に手が震える。鏡の自分はだらしなく、男を誘う娼婦の様だ。

「食えてる。」

「お願いイカせて！くううう辛い。」快樂にあおられ続ける。一気に解放されたそれは巨大なダムが決壊するがごとく。

今までのほつた事も無い高みまでデビロットは、昇り上がっていた。周りの景色が統べてピンクの霧がかかっているように見える。

体内から血液が吹き出しているのではないかと錯角させられるほど、放出されていく快樂の波。

「たかいいい！高いのおお！こふあいい。まだ昇るううう！あああああ」

身体の中をぶつとい官能の蛇が暴れている。身体中の性感体を揺るがしながら、内側からウネウネとウネウネと。

「ふああ、気持ち良いの。溢れるの気持ち良いのが溢れるの。止まらないの！」

2時間の刺激は、快樂の頂きの頂点の直前に無理矢理縛り付けられ、匂いも触感も直前で抑えられ、焦りといらだちで心までがしびれきっている。快感は既に拷問と化し容赦なく煽り立てる。

「くうううううああああああううううううう」

ちよつと気を許せば欲しいと口走りそうで、その一言が確実に敗北に続きそうで、必死に押さえ込む。

「欲しい欲しいほひいほひいいい」

気が変になる。樂にして：

「ふうううはあああ」

やらしいよおお、鏡の自分。股間は水着がピツタリ湿り張り付いている。振動と電気がクリトリスに響く、クリトリスから脳へ直通で痺れが伝わる。

「いっきそつああつ！ダメえ治まるまたああ！」

腰ががくがく揺れる。止められない。熱いの止めて。とめへ、とめえ。

3：ひ時：間ん

「ひあああああああああああああ」

ガクガクガクガク

ある意味待ちに待つた瞬間は突然訪れた。

「ふあはつ！」

秘裂を突然、捻り込む様に侵入してくるものが。それは小型ながらその刺激は

強烈で脳みそが裂けるかの様に頭上まで響き渡った。3時間高められた快樂が一気に解放されたそれは巨大なダムが決壊するがごとく。

僅かに残っているデビロットの理性を、言葉での攻撃がはじまる。

アンモニアの独特的の臭いが臭覚をも強烈に攻撃してくる。

すべてをハツキリ認識できる自分の精神の強さが憎らしい。いつそ気絶できれば、でもそれは許されない。

ジヨオオオオオオオ

ヴァルハラの休日

「いっぱい出ましたね。とつても臭いですね。」
「うううう。うるふあい！ふあああ…」

すべてを出し終えるように尿意が静まつていく。身体から放出される様な快楽の波も同じように治まつていくかのような錯角に僅かに心落ち着きかけたその時、尿道に細い異物が侵入する感覚に強烈な恐怖が身体をさらに痺れさせる。

「ひぐううう」

普通ならかなり苦痛を与えるような刺激だが、今のデビロットは、そんな苦痛も快楽の刺激へ変換してしまう。

。さらにその異物からも電気刺激が：

「イヤアアアアアアアア。ビリビリいやあああ」

下半身の大事なスイッチが麻痺させられる。

「また出ちやウウウウ出ながらイツチヤウ」

細い異物は、カーテル状になつており、強制的におしつこを放出させていく。

「からっぽになつちやう。このままじや…」

「女性の身体とは羨ましいですね。快楽を連続して味わえるのですから、男は出している時が快楽なので連続で快楽をは味わえない。羨ましい。」

「まだ続けるのこんなの連続してまだ続くのお」

ズウウウン

「ひぐうううあうあうあ」

今度は菊座に異物侵入が…。また頭上まで突き抜ける。官能の蛇が暴れまくる。内から外へ外皮を快感の波が抜けていく。止まらない。おしつこも止まらない。

床に水たまりが広がっていく。

「お尻がとつてもイイみたいですね。さすが最高の遺伝は、感度も最高ですね。」

「ふあああ、ふあああ、気持ち良いのが止まらない。止らなおおお」

おしつこはまだ出てるのだろうか。排尿感は続いている。吹き出し続ける快感の波と共に、永遠に続くかの様に。

「もう少しですかね。もうすこしで落ちそうですね。」

4時間が経過した。実験してきた女性112名、この時間まで耐えた女性は今まで誰もいなかつた。

新記録だな、しかし、もう少しだ。その徵候は出ている。落ちろ、我が手のものとなれデビロット。

「うあああああああ。またイクウウウ。ヒグウウウ」

気絶も許されず1時間、官能の頂点を彷徨い続けさせられた。身体は火照りで痺れきり、触感だけを異常に敏感に僅かな刺激を捕らえ鋭利な刃物となつて官能中枢を傷つける。傷つけられた官能中枢からジクジクと愛液がほとばり出し続けている。感覚は快楽に集約させ、他の感覚は麻痺している。

汗が涎が身に付けている水着が、全て自分を攻め立つてゐる。

目の前の鏡の自分は、甘える様な瞳、だらしなく開きっぱなしの口、髪は乱れ汗で身体に張り付き艶かしさを増長させている。そんな自分の姿が愛おしく見える。乱れ捲り官能に打ち震えるその姿が、自然の自分の姿の様に思えて。

「はああああああ、らめえええ。くうう。またあああイクウ。」

がくがくがく。

菊座と秘裂と尿道を同時に電気で燻られ。内を搔き回され休む事は許されない。

「さあ、快楽に統べてを委ね自由になろうデビロット。一言で全てが解放される。樂になれる。」

「うるさあああい。わたしわあああ、られの指図もうけなああいああああああ。死んでも、狂つてもおおおお」

「なぜ落ちない。なにが支えている。これが、王家の強さなのか？なぜだ」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

「精神値まだ良し、脳波危険値以下まだ精神が持つ…。すばらしい。やはり手に入れたい、その全てを。最後のかけに出るか。失うモノは何も無い。手に入るもののは大きい。精神高揚剤追加、最終プログラム始動。自動安全装置Dレベル」

「さあ、最終勝負だ」

「さいしゅうしようぶうう？くふああああああああ？！」

突然目の前の色彩感覚が乱れる色がごちゃごちゃに、そして異常な浮遊感。

「あああああきもひいいいいいい、いいいいいいいいいいいいいい」

身体がばらばらになつちやう。

「脳内麻薬値最高。色彩異常発生。電気刺激最高レベル、責め具稼動レベル最高、マックスの快楽だ、耐えられる訳が無い」

「くつわああああああああすごおおおおおあああ、だめえええいくうううう

ううくううう

ガクガクガク身体中に震えが広がる。腰が跳ね回る。

責め具が猛烈に複雑な動きで内臓を前後に抉り回る。

電気刺激が表と裏から、敏感な部分を攻め立て回る。

「ツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツツ

「声も出ないほど気持ち良いですか。さあ落ちなさい。樂になりなさい。」

「うううううううあああああひやああああああああ

「さあ！」

もうだめ！だめ！すごい！もうだめ！

「ああああああああ

「さあ！」

「うるさああああひ！うつけものおお！わたひは、わたひはあああああああ

ああああああああああああ！」

……
「うつつつつ」

薄い光。背中にかかる感覚はベッドのようだ。

「こんな固いつくりの悪いベッドは……」

ここは……私は……。

ハツ！

「気付いたかね。」

先ほどまでいた部屋と違う部屋だ、あきらかに居住用のスペースの様だ。

薄い明かりが着いている窓は無いようだ。

アストテリオスがベッドの横に腰掛けてこちらをジッと見ている。

「……つか……」

「悪いが薬を使わせてもらった。今は身体の自由が効かない。まともに喋る事もできないでしょう。」

「……」

「約束の時間まで、あと1時間ちょっとだ。」

「もう、私の負けは確定した。ならば最後に、その完璧な美しさを、愛おしいあなたの身体だけでも、一瞬だけでも我が物にしたい。デビロット」

静かにその金色に光る髪に指をかける。つやつやの髪は指の間をすり抜けていく。

紺碧の瞳が真直ぐ見つめ返してくる。その冷たい光がクールで何者にも屈しない力強さを現している。

とても美しい純粹に凍り付いた悪の眼差し。全ての悪を魅了する青き冷眼。

「はじめからこの瞳を真直ぐ見れていたら、結果を予測できたのかもしれない。」

指が頬を滑りうなじに滑り込む。

ピックン 軽い反応。

頭を抱え上げそのまま柔らかそうな唇を、薄ら開いたその唇を自分の唇で覆い尽くす。

甘く軽い息が僅かに口の中に広がる。

「ふうう」

僅かに鼻孔から漏れる吐息。静かにして慎重に舌をデビロットの唇に這わしていく。瑞々しいぶつからした唇を味わいつくし、舌をわずかに開いた口孔に忍び入れる。暖かい。デビロットの舌を捕らえ絡める。唾液が混ざり合い、お互いの舌をコーティングしていく。ぬるぬると暖かく柔らかく。

ゆっくり唇を放す。唾液が糸を引く。そのまま舌を首筋に持っていく。そしてゆっくり鎖骨の当たりまで呑め下ろす。ゆっくりゆっくり味わいながら。甘く僅かに塩っぱい味がする。私はこの味を忘れはしない。朽ち果てても。

「ふうつ：あ」

デビロット：まだ身体の火照りが治まりきってはいないのだろう。肌が僅かに染まり始めてきた。

ウンピースの水着を肩からずらし脱がせる。僅かに指が震えて、若干手間取った。童貞の少年の様に、その裸体を見る為に焦ってしまっている自分に苦笑する。ベッドに横たわる、その白魚の美しさに一瞬息を飲む。

そしてまた苦笑。

デビロットは静かにめを閉じている。最大の武器は今は収納されている。睨み付けられることを予想していた為、意外だった。

ヴァルハラの休日

その美しい身体のどこから味わおう。なめらか背中のライン、僅かにろつ骨の浮いた脇のライン膨らみ始めたまだ固さだわざかに残っている胸のライン、細くしまった陶器の壺のような腰骨から太股のライン、白くスラット伸びる清涼感あふれるふくらはぎのライン。

今は総て私のモノだ。

大切な宝物を扱うように慎重に胸のラインを右手の中指と人さし指がなぞつていく。

すべすべの柔らかく弾力にとんだ若い女性の肌、僅かに汗で湿気を帯びしつとりしてきた、そのまだ小さい膨らみを存分に楽しむ。

ピツクン・ピツクン

「ふううう…あっ…はあ」

発する僅かな声に、湿ると熱が帶びてきた。その僅かな反応と声を楽しみ確認するように指を胸から乳首にすべらせ乳首の周りをくるくると優しく愛撫する。

「ふああ…」

乳首は痛々しい程に、固く尖つて私を挑発してくる。私は唇を舌でくるみ、口の中へ転がすように嘗めたいという衝動にあつさり降伏し、即座に実行する。そのみずみずしさに思わず、嘗めまわすのに夢中になってしまった。

「くうううふうう」

強くし過ぎてしまつたか。若く尖つた乳首では、ちょっと痛かったかも知れない。

今度は優しく乳首の周りをなめる。この僅かにしょっぱくて、甘い香りを放つ肌の味は、まるで私に取つ手は麻薬の様だ。脇も腕も指も太股も背中もとことんなめ回す。僅かな反応に神経を集中させ、反応の良い部分をさらに丹念にこね回す。

背中は腰の上あたり

「あっ…ふつ」

そして脇の下

「ひひやつ」

そしておへそ

「うううん…」

足の付け根

「あああん」

太股の内側

「やああ…」

やがて少女独特の若草の匂いが私の鼻孔をくすぐりはじめた。薄い若草の茂みを指でかき分け、指に絡ませ、またかき分ける。

瞳は強くつむられている。

匂いは強まる。いよいよ核心へ。

僅かに潤んだその秘裂はまだ襞もあり除いていない初々しい姿を私に見せつけてくれた。

私の股間は張り裂けんばかりに膨張し熱くほとばしっている。

深く匂いを吸う、神経が麻痺しそうな、軽いめまいににた衝撃が脳をかける。

襞にそつて舌をそつと這わしてみる。

「うあああ」ぶるぶる。太股が僅かに痙攣。

ピンクの肉刺がパンパンに膨らんでいる指で剥き傷口を優しくなめる様に舌で愛撫する。たっぷり涎を撫で付けながら、優しく愛おしく。

「ああああうああああ」

ペチャベチャクチャクチャ

愛液が次々に沸き出してくる。それをすすり上げ、肉刺を舌で刺激しなめ味わう。

しつかりと味わう。

「うううあうあ」

さらにあふれ出す泉の中へ、舌を尖らせて突き立ててみる。

「ああ」

あたたかい、この中に入れたい。奪いたい。我慢なんかできない。もうこの一瞬があればいい。

猛々しく呷り立つた私のものを手早く取り出す。一秒も無駄にしたく無い。

一瞬デビロットの固く閉ざされた眼が僅かに開いた、その瞳には怒りの憎悪や恐怖の色はなく穏やかに澄んでいるように見えた。

「ふつばかな！」

恨まれてもいい。もうどんな悲惨な殺され方をしてもいい。一瞬でも肉体だけでも我が物となれば。

「つうつ」

狭いデビロットの中へ、静かに静かに、焦る気持ちを押さえて。

ブツツウ、途中でわずかな抵抗があった。

「処女膜はちゃんと残っていたな。激しい機械攻めだったから不安だったが。」

もう思い残す事は無い。この征服感だけで満足だ。

「ふう……」

私の胸の中でデビロットが浅い息を吐く。私の胸の中で。

「もう、終わりか……」

もう薬は切れてきたのだろう。僅かにまだ霸氣の弱い声だが。

私は無言でゆっくりと動き始める。

大事に大事に

「くっ……あつ……ふあ」

押さえこむような微かな甘い声が断片的に聞こえる。

「美しい、その全てが完璧だ。デビロット……」

髪を優しく撫でる。頬を撫でる。その小さい身体が私の下で、私に身体を預けて揺れている。

身体の自由がもどり始め、私もモノを強く絞めつけ始める。

強烈な快感が私を襲う、まだ、この幸福感をまだ味わいたい。

デビロットが私の腕を強く握りしめてきた。

眉間に皺を寄せ必死に耐えている。

「くうああ……ああ」

もうすこし……あともうすこし

「……きて」

「私だけのデビロットよ。さようなら」

「うおおおおお」

「あああああああ」

私はありつたけの熱いほとばしりを吐き出した。

デビロットは足を突っ張り背を弓なりにし、その全てを受け止めていた。

「あああ……熱い、お腹が」

7時間を告げるアラームが鳴り響いた。

はじまる前は聞く事なく終わると思っていたが：

「時間の様だな。シャワーはあるか。」

私は右奥の扉を指差す。

「では、借りるぞ。」

：

シャワーの音が奏でる音を聞きながら、私は自分の人生を振り返っていた。

孤児院でのこと、学校でのこと、全てを知ってしまった夜の事、そして今日の事。

こんな人生でも悪くはないな。紫煙を眺めながら独りつぶやく。

その時、1機のスパイタイップの小型4脚自走ロボットが空調ダクトを突き破つて現れた。

私はとっさにベッドの下に手を突っ込む。愛用のハンドニードルガンの感触、斜前に転がりながら手にしたニードルガンをブツ放つ。

「もう来たか。くそ！」

蜂の巣になつた自走ロボの機動停止を素早く確認する。

「セキュリティーは？」

テーブルの上のモニターをチエック。

「機能してない。ハッキングされた。クツ、デビロットを」

振り向くとそこにデビロットがバスタオルをまいただけの格好でスクランブルを見ていた。

「発見された。非常脱出口は確保してある。そこから逃げてくれ。あなたをこの様な目に合わせておきながら、言えたことではないと解っていますが、あなたは逃げて下さい。あなたなら……」

デビロットの紺碧の瞳が妖しく光る。

「逃げる必要は無い。」

「しかしこのままでは、」

バシュー、入り口の開く音。

「間に合わなかつた……」

落胆の面持ちで扉を見つめる。そこには1人の男の影が：

「迎えに上がりましたデビロット姫」

静かで重圧感のある低い声。デビロットは、微笑みを浮かべて答える。

「少し早すぎじゃ。地獄大使。」

「暗殺にしては情報を細かく集めすぎてる。」「なるほど。」

私の隠れ家は実はリゾートコロニー「ヴァルハラ」の外層ブロックにあった。製造工事の時に使われ現在では使われていないブロックを改造して作った物だ。

デビロットを誘拐後、コロニー港から逃走する痕跡を偽装し、こちらに隠れていたのだ。そして今、コロニー内部のデビロット私邸の1室に私はいる。デビロットは今、簡単な検査を受けているらしい。いつたいどうなっているのだろう。2箱のタバコを費やして考えたが解らない。3箱目の封を切りかけた時デビロット姫は扉に入ってきた。

「状況が理解できないといった顔だな。」「はい」

「では、説明しよう。」

「貴方の存在は、闇の金融ブローカーとして前々から調査していたのじゃ。残念ながら出生や顔写真を入手できなかつたがな。そして、何者かが私の近況を調べる為に多くの情報屋を使つていると言う事実も私も耳には入つていた。その目的が誘拐ということも想像できた。そして休暇直前、私のまいた餌によく貴様はかかつた。慎重すぎるほどの貴様がようやくな、以前より間接的にめぐらせてようやく貴方に掴ませた現金が流通した。慎重な貴様が、現金をグリーニングせず使用するなんてよっぽど急な取り引きだったのか。使用したのは情報屋、最近では珍しい現金オンリー支払いの古参の情報屋。やつが売つた情報は私のバカンス時のテレビ局取材スケジュール。この時点での誘拐を目論む者があなたと結びついた。」「なるほど、あの時失敗したか。」

「私は、あなたを知るチャンスとしてわざと誘拐されて貴方と接触する作戦をたてた。しかし、貴方がテレビ放送を私を陥れる道具に使うとは考えも及ばなかつたは、私は貴方の計画が放送当日以降として作戦を起してしまつた。そして誘拐。こちらの計画でうまくいったのは、私が貴方と接触するという部分だけ、何かあればすぐ救出部隊が来る状況は作れなかつた。さすがに焦つたわ。」

「なぜ誘拐だと。暗殺の可能性は考えなかつたのか。」

「誘拐後の私の出生の謎を知られ、目前でクローンが生放送に出演したあの時点で私もここに戻れると思わなかつた。でも救出に来たロボットが今回の接戦作戦の指揮者である地獄大使専用のモノだつたことで、うまくやつてくれた事が良く分かつたのじゃ」

「クローンの貴方はどうなつたのですか？」

「あれは地獄大使が今回の作戦でもしもの時の為にと作っていたアンドロイドです。有線コントロールで、もしもの為に密かに作つていたそじやが。助かつた。あれにより貴方の通報も王国中枢がいたずらと判断したそじや。」「なるほど。で、あなたは何の為に私と接触したかったのですか？」

「貴様の才能がほしかつた。父は悪として尊敬する私の大好きな存在だが、父なら平気で私を裏切る日が来るかもしれないとは、考えていた。」「では、私は……」

「約束じや、これから私に一生の忠義を誓え。」「デビロット姫」

「私は敵勢力に捕まつた時に備え、拷問耐性訓練を受けておる。しかし今回は強烈だつた。」

「……私の完敗ですね」

「いや。良く健闘した。精神的な揺さぶりはきつかった。でもそれより：最後のセツクスは危なかつた。正直、男にあの様に優しい：何というか、あつ：愛情のこもつた接し方をされたのは初めてだ。」「私も初めてです。」

「今日より貴方は、デビロット親衛隊 経済研究所主任に任命する。良いな」「有り難き幸せ！私の命デビロット姫に捧げます。」「父への復讐心はまだ強いか？」

「皆無。姫の意思に従います。」「良き働きを期待する。さすれば、褒美として甘えにいってやつても良い。お兄さま」

紺碧の瞳が涼し気な笑いを浮かべている。

私はそれに答えるように微笑む。我が愛しき妹の為に……

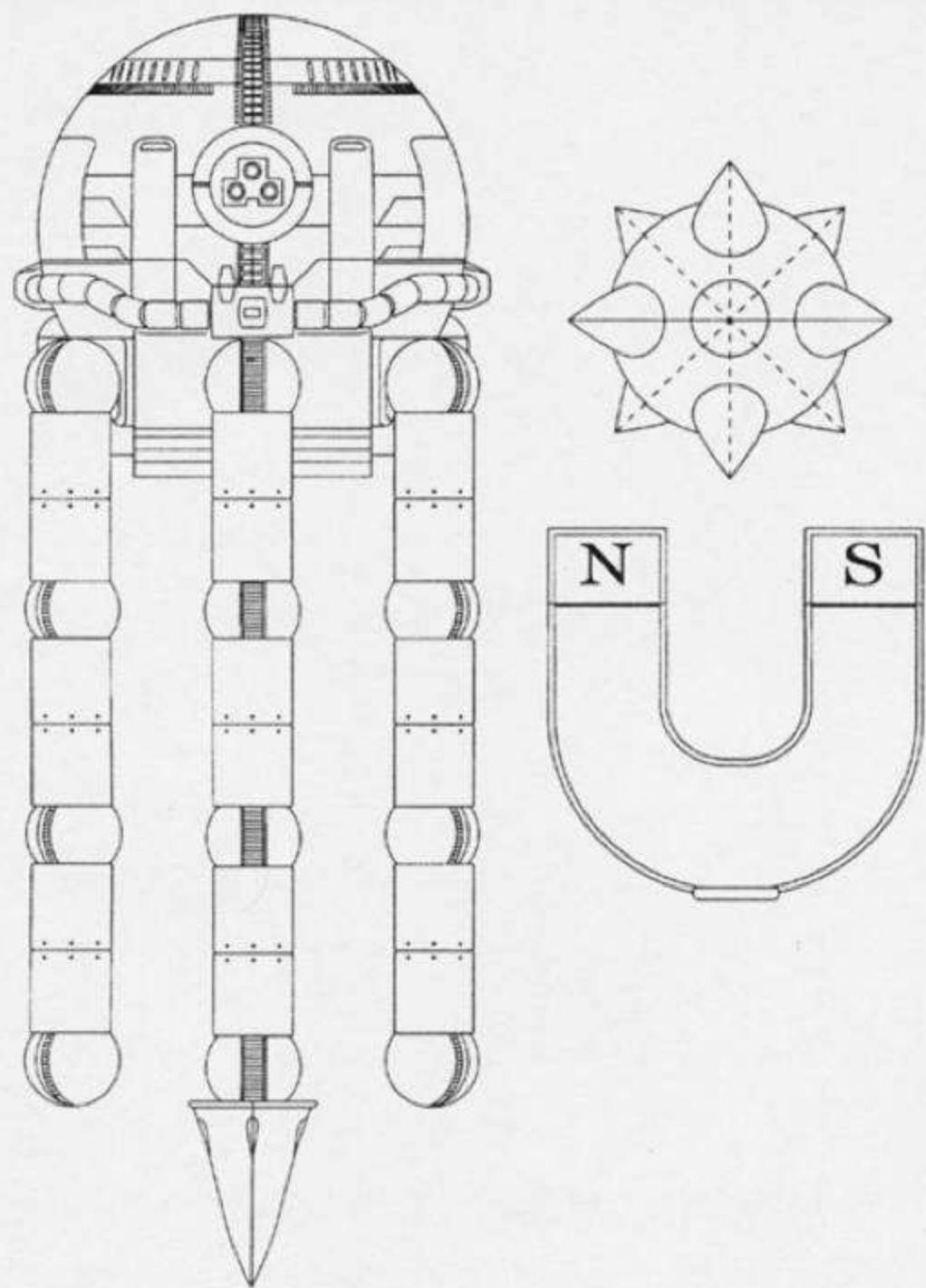
END

＊表紙案B.

つを出した胎が良うげかな?と
や,これでよひで,なんか
上手くまとまりませんでしょ。

でも,なんか,変な機械の中
から,濡れもほった少女が
ヌホ～と身をつま出だる。
「良うげかな——
と思,たのですが。
なかなか思ひ通りには
描けません。トホホ。





後書き

独楽

またまた時間が無い!おかしい今回は速めに上げる為に、1ヶ月近く前から書きはじめたのに…。何でこんなに時間が無いんだ。未だに「かまいたちの夜2」はオープニング見ただけで進めていないのになぜ!

白詰草話のがチャやりに大阪行ったのがいけなかったのかなー。

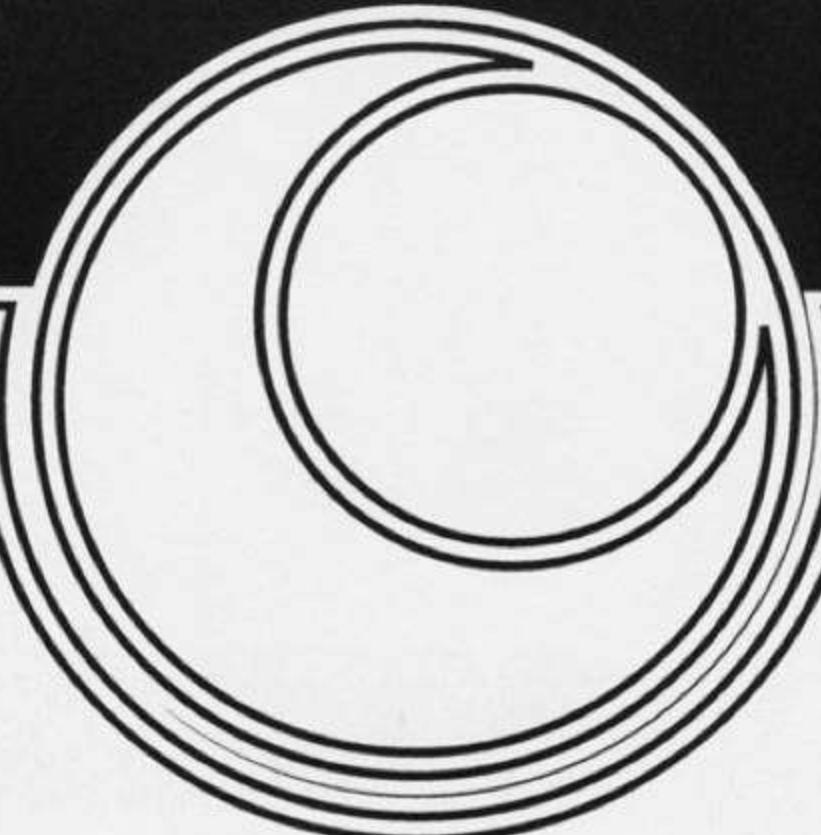
東京の恐竜博に行ったのが悪かったのかなー。

追伸一

今回の小説について、前回書いた小説とは、別次元のお話になってしまったなー。関連性をつけた方が面白かったかな?今回コンセプト表なる物を作って書き始めたのに役に立たず…。結局、最後のつじつま合わせに苦労してしまいました。

影の月

もう歳を重ねてかよくなってす 葉と い夜はひまでも もうペンがにぎねません。
か今か今です
置く下さ、下さ、本当に申し訳ございません。



第一王女 近衛師団 5.5

The first Royal Princess
Of Guards Division

発行者 影02虎

発行日 2002年8月11日

印 刷 サンライズ

スタジオ生

禁

無断転載・無断複製

未成年者の

閲覧・貸与・譲渡



第一王女近衛師団

Publications
of the
First Army
of the
Imperial Japanese
Army

5 · 5

*Erster prinzessin
leibgarde division*

5.5



第一王女近衛師団

Publication
S.Armada Inc.

5.5